吐方
汗方
下方

答曰、是病を治する事の、手に入たる人にあらざれば、爲事かたし、病に名をつけて、病因を論ずるは、もと臆見ゆゑに、十日も、其藥方の効なき時は、心に疑ひおこりて、方をかゆるなり、扁鵲のごとき疾醫は、病毒を見定、此毒は、此藥にて治するといふ事に決定するゆゑ、たとひ藥の効なきとても、病の治する迄は、藥方をかへざるなり、其内に、自然と病毒の動時あり、動ときは、大に瞑眩して、病治するものなり、病治したるあとにて見れば、其藥方かはりては、治せぬ事知るゝなり、又其病に中るあたらざるをゑらず、唯方をかへぬ事を自慢して、人を惑すものあり、是は無法者のする事なり、必惑べからず、是を糺さんと思はゞ、其病人の治しやうを問べし、

〔醫斷〕治法

治有四、汗、吐、下、和、是也、其爲法也、隨毒所在、各異處方、用之瞑眩、其毒從去、是仲景之爲也、如其論中所載、初服微煩復服汗出、如冒狀、及如醉狀得吐、如蟲行皮中、或血如豚肝、尿如皂汁、吐濃瀉出之類、是皆得其肯綮然焉者也、尙書曰、若藥弗瞑眩、厥疾弗瘳、可觀仲景之術、三代遺法也、今履其轍、而嘗試之、果無有不然焉者也、於是乎吾知其不欺我矣、然世人、畏瞑眩、如斧鉞、保疾病、如子孫、吁其何疾之除哉、甚矣其惑之也、

〔辨醫斷上〕治法

汗、吐、下、和、四法者、乃治疾之鈐鍵也、故量夫賊邪輕重上下表裏、所用得當、効誠若鼓應桴矣、然是皆治實邪之法、而非所以補益其眞元也、余在長崎、治一人、積年腹痛、用倒倉法、良已、一老者、亦有此患、私傳其法、自行之、隔宿亡、故忽亡矣、故經不云乎、不治其虛、安問其餘、蓋嘗竊觀仲景之治、其於正氣致慮者往々不少、顧粗鹵者弗察耳、哀哉、

〔弘簡錄二百四十六載記金〕劉元素張從正○中略

張從正、字子和、睢州考城人、精於醫業、貫穿難素之學、起疾救死、多所取効、世傳黃帝岐伯所爲書、有